

第8回ユネスコスクール全国大会に参加概要報告

奈良市立富雄第三小学校 教諭 河野 晋也

2016年12月3日、金沢大学（石川県金沢市）にて、第8回ユネスコスクール全国大会が開催された。今大会はESDの10年の成果と課題を踏まえて企画され、今後のESDの方針や実践者をつなぐ意味においても重要な意味合いをもつであろうSDGsについても言及される意味ある大会であった。

(1) パネルディスカッション

午前中のパネルディスカッションでは、及川幸彦先生（東京大学）、鈴木先生（金沢大学）らが登壇し、ユネスコスクールの今後の発展と連携について意見が交わされた。ユネスコ共同学校の盛衰や北陸地域でのユネスコスクールの連携についても言及された。例えば校内で中心的にESDを進める教員が転勤・異動することが、校内でESDを継続していく上で大きな問題となることは、常に語られ続けている問題であろう。地域のコーディネーターや、生徒のクラブ活動などの組織を校内に作ることもホールスクールアプローチのひとつとしても大きな意義を持つ。同時にESDを推進できる教員の育成は必須のこと

と思われる。教育の一環である以上、生徒の実態をつかみ、それに応じた目標があり、質があると考えている。我々は教員として最低限その点を追究していくべきだと考えている。そういった意味においてもSDGsの持つ意味は大きい。より明確化された内容により教育の垣根が低くなるという可能性はあるだろう。また奈良ではコンソーシアムの活動が活発に行われているが、こうした教員間の連携が密であることは全国的に見ても珍しいものであるようにも感じた。貴重な場であることを意識しつつ、一部の教員にとどまらせることなくコンソーシアムの輪を広げていきたいと考えている。

(2) テーマ別分科会

テーマ別分科会では、第9分科会の「ESDの学習と評価」に参加した。千葉正法先生（東京都多摩市立東愛宕中学校校長）の発表を聴き、参加者と評価について意見を交換した。東愛宕中学校は生徒指導面での課題も抱える中で、生徒主体の授業をすすめ、はちみつの販売を生徒が行うなど活発な活動が継続的に行われている。そういった活動を紹介しながら、SDGsや新しい指導要領で重視されるコンピテンシーベースの授業を見据えつつ、どのような姿をどのように評価していくべきなのか、報告がなされた。参加者からはそれぞれの学校で実施している様々な評価の方法、例えばルーブリックであったり一年間のめざす児童の姿を明確に示した計画表をつくっていたりと工夫を凝らして何とか評価が明確になるよう、



また恣意的にならない公正な評価をしようと苦心している様子うかがえた。また、ESDは行動の変革を求める学習である以上、小学校6年間、中学校3年間だけでなく、その後の将来にわたって、長い目で評価していくことが求められるという話も出ていた。コーディネートされた手島校長（江東区八名川小学校校長）は評価にあたり通知表の記述に一工夫を加えることやESDによって学力も同時に伸びていくことを資料を提示しながら示された。はっきりと目に見える知識だけでなく思考・判断や行動化をも評価することが求められるESDでは、評価の難しさは当然である。また「何をもって成長と捉えるか」という点が明確になることで授業者が組み立てを意識しやすくなると考えられ、ESDの更なる広がりにも大きな効果をもたらすと考えられる。今後の自身の研究においてもESDをいかに評価していくべきか考えていきたい。



（3）その他

他にも昼食時には、企業の報告ではイオントップバリュ株式会社の報告を聞かせていただいた。小売業の地域貢献、国際貢献というテーマは、持続的に発展を目指すうえで非常に重要である。また日本で大量に廃棄される傘に着目して新たに商品開発を行うなど小売業ならではの視点での取り組みもすばらしいと感じた。それまで企業は利益追求を元として考えることが前提であったが、他の株式会社ユニクロやネスレ日本株式会社の報告を聞いていると大きく企業の姿勢が変わっていることが感じられた。もちろん企業が持続していく上では利益は必要であるが、それとSDが両立する可能性が示されることは興味深かった。